

タスクシフト/シェアで今後の輸血細胞治療分野はどうなる

◎奥田 誠¹⁾東邦大学医療センター大森病院¹⁾

はじめに

厚生労働省は2019年10月より「医師の働き方改革を進めるためのタスクシフト/シェアの推進に関する検討会」において、各医療職種団体へ現行制度上実施可能な業務と、移管可能な業務の提案を募った。日本臨床衛生検査技師会は、日本輸血・細胞治療学会の協力を得てタスク内容を提案した。輸血・細胞治療分野からは、実際に現場で実施され、明確な制限のない業務を中心に提案した。臨床検査技師の業務拡大を図り、医師や看護師の業務負担の軽減に繋がる内容とした。

輸血・細胞治療部門で求められるもの

輸血担当の臨床検査技師に求められるものは、安全で迅速な輸血療法が実施できるよう取り組むことである。そのためには正しい知識と技術、柔軟な判断が必要である。輸血・免疫学の知識を生かし、輸血に携わる臨床検査技師は、輸血・細胞治療全般について専門性を生かし、臨床現場で医師や看護師と協働し活躍することが求められている。

輸血検査以外の業務

輸血・細胞治療領域では、輸血副反応の予防や有効利用を目的として、血液製剤の洗浄操作や、小児・新生児領域での小容量分割作業なども実施している。これら業務は法制上制約がない。輸血療法を実施する際には、医師による説明と同意が必要である。しかし、医師は輸血学や感染症リスク、訴求調査に関しての知識は薄い。また、患者へ検査結果について詳細は理解されている医師は多くない。輸血承諾書の取得補助や検査結果説明業務について、厚労省医政局の検討会では、臨床検査技師が行うよう推奨している。

今後期待できる業務

2045年問題では臨床検査領域でAIの開発が進み、臨床検査技師としての領域が狭小化の可能性がある。輸血・細胞治療領域は、検査室業務は勿論であるが、検査室外業務として輸血準備作業や、輸血中・後の輸血副反応観察についてベッドサイドで看護師とタスクシェアを行い、医師や看護師の負担軽減を図る事が期待される。今回のタスクシフト/シェアで、末梢血管確保並びに電解質輸液の投与が可能になったため、新たに救急現場の活躍も期待される。

最後に

臨床検査技師の主な業務は診療の補助目的で、医師の指示のもと検査を実施する事である。しかし、臨床検査技師も多くの医療知識を持ち合わせ、医師、看護師と対等に業務を行えるスキルはある。従来検査室に閉じこもる業務から、臨床側で活躍できるスキルを習得しそして発揮し新たな臨床検査技師像を描いて頂きたい。

E-mail:okuda@med.toho-u.ac.jp